

金文に見る古代語の文字表現 (二) —— 「限定符」を付加した文字表現

高 島 敏 夫

はじめに

「古代語」という概念を立てて、付加要素を「限定符」と名付け、言語と文字との関係を考えてきた過程で気付いたことがあるので、そのことを最初に記しておきたい。「象形」概念に關するものである。甲骨文・金文は、言葉で伝えるべき事物や形姿・場面・圖解・圖示の類をシンボリックに描くことよって、「イメージ」として伝えようとした文字である。これが「象形」という言葉で説明されてきたことの本質であって、単に物の形を表わすだけが「象形」なのではない。むしろ「何をしているところかを描いている文字」という言い方をすれば、の方が適切な場合がある。こう捉えることができれば、「會意」だが「全體象形」であるとか、「會意」だが「場面象形」であるなどと苦しい言い方をしなくても済むわけである。言葉の意味するところをイメージで描き出した文字が初期漢字の甲骨文・金文だということを何度も強調しておきたい。

一方、文字から言葉の意味するところを読み取る側からすれば、そ

こに記された「イメージ」を通して、言葉が發せられた場を追體驗することが求められている。言葉を表現する者とそれを理解しようとする者との關係はこのような構造になっているのが、「古代語」の世界である。その言語場を追體驗するということ。それがどこまでできるかが、甲骨文・金文を理解する上での鍵を握っている。観点を換えると、イメージ化された文字の形からは、表現者の言葉に對する認識の仕方が窺われるということでもある。

今回は、イメージ化された「限定符」から表現者の言葉の認識が窺われるという観點に立って、様々な文字表現を整理していくが、手始めに多様な「限定符」が用いられる「各」の例を見ておくことにする。この時期の「各」は「各自」の意味に使われず、もっぱら「格る」の意味で使われる。その「各」字に加えられる「限定符」は四種類見られ、甲骨文も含めれば五種類になる。これほど多様な付加要素を加える例が他に見られないのは、「各」が重要な意味をもった語(文字)だったからだと推測する。金文では「𠄎(各)」は「王各大室」(王、大室

に格る)のように、王が儀禮の場に來臨する時に用いられることが多いが、もとは神がこの世に降臨することを意味する語であった。

そもそも「格る」という行爲「動き」そのものが嚴肅な儀禮の一つの過程であり、動き始めてから儀禮の場に入場するまでの動きの過程にも様々な局面がある。例えば、「王各大室」のような「宮廟」に入る局面を捉えて「𠄎」に「介」字形を加えた「𠄎」字形で表わす場合がある。あるいはまた宮廟に格る道を行く動きを念頭に置く場合には、「𠄎」字形に道を表わす「イ」字形を加えた「𠄎(格)」という字形で表わすこともある。あるいはまた「遼」とされている場合なら、動詞であることを明示したり動きを示す時に用いる「𠄎」字形を「𠄎」に加えて「遼」字形にしているが、この場合、宮廟に格る動きそのものを捉えた表現になっているのである。

少々意外に思う向きもあると思うが、「洛」になっている例が一例だけある。

大師虜乍彝隣豆、用邵洛朕文且考《大師豆》

(大師虜、蒸隣豆を作る。用て朕が文祖考を邵格す)

「邵格」は、この場合祖先の文祖考を招ききたらしめる、つまり招ぎ降ろすという意味である。「洛」と書かれていると直ぐに「洛邑」や「洛水」のことを意味しているものと反射的に思ってしまうがちであるが、文例を見て明らかのように、「格る」の意味に用いられている。この場合、語の認識の仕方としてはどのようなことになるだろう。私の理解の仕方では、宮廟が建てられた所は、辟雍がそうであるように三方が水に囲まれた地形になっている場合がある。この字形でもって

「格る」の意味を表わした記録者は、水に臨んだ宮廟を念頭に置きながら、つまりイメージして、「洛」の字形で記したのではないかと思われる。

今回はこのような観点から「限定符」を分類整理したものを参考に供する。儀禮の場が多く出てくる金文の性格上、儀禮方面の語彙が多く、自ずから「限定符」もその方面のものが多し。以下、言語場の追体験がどこまで功を奏しているか定かではないが、一つの試みとしてご覧頂ければ幸いである。必要に応じて例文も掲げておく。

一、儀禮に関するもの

宮廟を示す付加字形には「介(𠄎)」「𠄎」などがある。何れも儀禮の場で行なわれたことを明示するものである。

「介(𠄎)」

○殷Ⅱ殷とも書かれる。殷王朝の祖先を祭る祭祀のことである。《臣辰貞》に「既望辛酉、王令士上眾史寅、殷于成周」(既望辛酉、王、士上と史寅とに令して成周に殷せしむ)とある。殷が減び西周王朝の時代に入ってから、前期までは主に庶殷の集住する成周で殷の祭祀が行なわれた。「衣祀」(殷祀)あるいは「衣」と書かれることもある。宮廟を示す「𠄎」が付加されるのは、國名としての「殷」ではなく、儀禮の場であることを明示するためである。

○親(親)Ⅱ金文では「親おや」の意味に用いられることはなく、「親しく」あるいは「みずから」の意味に用いられる。《通殷》に「穆々王親易

「人色」が表彰される場面で、王自らが適に賜與したことを記している。「親」字形だけでもその意味に使われるが、更に「宀」を付加しているのは、それが宮廟で行なわれたことをイメージ化しているのである。なお、『説文解字』の「親」の項にいうような「至」の意味には使われない。時代が違うのである。

○寫Ⅱ𠄎Ⅱ揚。《禘尊》に「中易禘萬、禘寫仲休、用乍文考隣彝」（仲、禘に萬を賜ふ。禘、仲の休に揚へて、用て文考の隣彝を作る）のように見える。普通は「對𠄎」（對揚）と書かれ、いわゆる册令（命）の場において王からの賜物に應える意味に用いられるが、この字形では祈る形姿を描く「𠄎」の代わりに儀禮の場である宮廟を示す「宀」が付加されている。言葉の意味するところは同じだが、この場合儀禮の場を想定しながら文字表現をしているのである。任官式（册命式）は官職に任命するので政治の場と見なされがちだが、時代は政教分離の時代ではなく祭政一致の時代である。特に西周王朝の王は「天子」として「天」の代理で任官するわけであるから、任官式そのものが宗教儀禮の場である。宮廟を示す「宀」を付加する所以である。

○辟Ⅱ「辟」＋「宀」。《盟彙》に「善效乃友内辟」（乃の友を善效して辟に入れしむ）とある。白川は、辟を「のり」と訓み「法則に就かしめる」の意とするが、「法に入る」を「法則に就かしめる」と解釋されるのが私には理解しにくい。宀が宮廟の形で、辟が君主の意味である。「宮廟に來臨する君主の面前に導き入れて君命に従わせる」と理解した方が良いのではあるまいか。文意は、後文に見える「夙夕を

敬しむ、朕が令を濃つること勿れ」や「毋濃朕令（朕が令を廢する母れ）」に近い意味であろう。

〔𠄎〕

○厲〔厲年〕Ⅱ萬年。「萬」＋「厂」の形。宮廟を意味する「厂」を付加しているのは、宮廟で行なう祖祭の際に、結びの言葉として「萬年子孫永寶用」（萬年まで子孫永く寶として用ひよ）、つまり「一族の繁榮が萬年まで續きますように」と朗誦されるからである。宮廟を思い浮かべながらの文字表現である。

〔𠄎（𠄎）〕 拜禮の形姿である。

○邵（邵告）Ⅱ「邵告朕吾考」（朕、吾が考に邵告す）のように用いられ、宮廟に亡父を招ぎ降ろして告げるの意である。「召」は一般に召すと訓み習わしているが、祖神や祖靈を招ぎ降ろすのである。拜禮の姿を示す「𠄎」を付加して儀禮の場において招きおろすイメージになっている。「邵」字を用いた例に「邵王」があり、これを「昭王」と見做して、『鉄鐘（宗周鐘）』の「艮子廼遣間、來逆邵王」を「艮子廼遣間し、來りて昭王を逆ふ」などと訓まれてきたが、ここは「來りて王を逆邵す」として、「時の」周王を出迎えて儀禮の場にお出で頂くの意味に解すべきであろう。「邵」を適切な日本語で訓讀するのは難しいが「招く」が比較的近い。

〔D〕

○受_レ受。「受」＋「D」。《耳尊》の結びに「耳日受休」（耳、日に休_{たまもの}を受けむことを）となっている。「受」字に「D」字形が付加される例は他にない。「休」を「たまもの（賜物）」と訓んでいるが、必ずしも賜與された品々だけを意味するのではなく、むしろ主君の「恩寵」の意味も含むのである。この《耳尊》の場合、今後も日々このような「賜物・恩寵」を受けることを願う意味を込めて付加したものである。賜與の趣旨を記した冊書「D」を伴うので、付加したものとと思われる。

○舍_レ従來「舍」と釋文されてきたが、字形は明らかに「余」＋「D」である。意味は「王命を發する」の意である。發令の場における「王」の自稱は「余」で、北嚮「北面」して命を受ける臣下は「女（汝）」と呼ばれる。「余」は單なる一人稱ではなく、儀禮の場における王の自稱であることを押さえておく必要がある。²⁾この文字（語）については別に項目を立て、【補論】として末尾に附した。

〔食〕

○飤（餼飤）_レ食。普通は「人」形を加えないので、《命餼》「用作寶彝、命其永目多友餼飤」を訓讀する時も、「用て寶彝を作る。命其れ永く多友と餼食せむ」のように訓讀して濟ませる。左は食器の餼の形。わざわざ「人」を加えるのは、「食」字形だけだと一般的には儀禮の場に降臨する「神」が食する意になるからで、ここでは神を祭る「命（人名）」一族のものが共餐する意味で使っているからだと思われる。

○饗_レ奉。「奉」＋「食」。《彝餼》「用作饗餼」（用て饗餼を作る）。儀禮であることを明示して饗とも書く。「奉」は豊作を祈る豫祝的な儀禮だが、その際に餼という祭器を使うので「食」字形を付加したものであると思われる。

〔夙（夙）〕

夙_レ漁_レ。漁字だけで十分のように思われるが、兩手でもって供える動作「夙（共）」を加えた形である。《適餼》に「穆_{王才葦京、呼夙于大池」（穆_{さたる}王、葦京に在り。呼びて大池に漁せしむ）と見えている。いわゆる葦京辟雍の大池で行なわれた儀禮的な漁である。獲った魚は神前に供える「供薦」なので、「夙（夙）」を加えたのである。}

〔金〕

○鋤（鈴鋤）_レ勒。銅製であることを限定符「金」で示している。《班餼》

二 軍・兵を示すもの

〔戈〕

○戠方_レ鬼方。「鬼」＋「戈」。《小孟鼎》。「戈」を加えたのは、武器をもって向かってくる鬼方をイメージ化したのであろう。

〔𠄎〕

○旄（旄叔） Ⅱ 人名。「毛」＋「𠄎」の字形だが、「𠄎」字形が師（軍）を意味する限定符であるので、旄は師毛の意味をもつ。「師毛父」という人名も見える《師毛父殷》。この場合「旄父」と記される可能性もある。「旄」の音は一般に「ボウ」とされるが、「毛」と同音の「モウ」であろう。

○旃（師旃） Ⅱ 人名。「史」＋「𠄎」。「𠄎」は師（軍）を意味する限定符であるから、「師旃」とするのは文字表現としては重複の感があるが、「史」が王命を伝える職務を意味しているので、「史」とだけするよりも「旃」と表記した方が混乱を避けられるという意圖があったかと思われる。「旃」の音を「ジ」とする案には賛成しない。

〔禾〕

○穢（穫） Ⅱ 「穫」＋「禾」。《庚嬴卣》「王穢庚嬴曆、易貝十朋」（王、庚嬴の曆を穫はし、貝十朋を賜ふ）などの用例がある。一般的には「穫曆」と記されることが多い。「穫曆」は軍功などを表彰することを意味する動詞である。元は軍門のある所（麻・秣）で行なわれたので、「曆」字のように表わされる。ここでは「穫」字にも「禾」字を加えて「穢」とし、軍門のイメージを伝えようとしたものである。

〔林〕

○楚（疋） Ⅱ 「疋」＋「林」。助けるの意の「疋」に「林」字形が付加された。《載殷》「楚走馬」（走馬を楚けよ）のように使われる。「楚

辭」の「楚」字形ではあるが、「國名」としての「楚」ではなく、明

らかに助けるの意味に使われているので注意を要する語である。語音も「ソ」ではなく「ヒツ」であろう。助ける意味をもつ「胥」でもって説明する向きがあるが、「胥」が「助ける」の意味に用いられるのはかなり後のことで、最も古い文献の一つである『詩經』中の「胥」は、「共に」の意味に用いられるのであって、「助ける」の用例はない。白川靜『字統』「胥」の項に「左疋」と「左胥」とを擧げているが、「左胥」の表記例はない。「穢」の項でも見たように、「木」字形や「禾」字形を並列した「林」や「秣」は軍門を示したものであるが、「楚」の場合、軍功を表彰する場を象徴する「林（秣）」を付加することによって、武人として助けるという意味を含んだものと思われる。

三 人を示すもの

〔人〕

○朋友（朋友） Ⅱ 「朋」＋「人」字形。後には「人」字形を略して「朋友」とするので見慣れている言葉ではあるが、金文に頻出する「朋」字は、「賜貝二十朋」（貝二十朋を賜ふ）のように使われ、本来は貝を數える時の單位名である。それと區別する意味で敢えて「人」の形を付加したものである。

○棚（棚生） Ⅱ この場合は「棚生」という人名である。《棚生殷（格伯殷）》に「格伯取良馬乘于棚生」（格伯、良馬乗を棚生より取る）と見える。前項と同様に貝の朋ではなく人名であることを明示するため「人」字形を付加している。

【参考】甲骨文中にも畢に「人」字形を付加した字形が見えるが、それは後に西周王朝に服属する畢氏のことである。甲骨文中では「𠂔(畢)」字形に「人」字形を付加し「𠂔」のように表わしている。「畢」は鳥獸を捕獲するために用いられる長い柄の付いた網であるが、それと區別するために「人」字形を加え、人名であることを明示したものである。敢えて釋文すれば「𠂔」となる。

○𠂔(何) 人名。《何殷(何殷)》に見える。字形は「可」+「𠂔」ともされてきた字形だが、あまり鮮明ではなく「可」+「人」とも見える。もしもそうだとすれば、音を示す「可」に限定符「人」字形を付加した文字表現と見ることが出来る。

【王】
○玟・珅・玟珅 〓 「文」+「王」で文王を示し、「武」+「王」で武王を示し、王名であることを明示している。「玟王」・「珅王」の表記もあるが、「文武」と表記されるところを「玟珅」と表記することもある。なので、「玟」一字だけで「文王(二字)」を表わす合文ではないと思われる。

四 動作全般

【𠂔(走)】 動詞であることを明示したり動きを示す時に用いる。
○𠂔 〓 走。「走」+「イ」だが、そうすると「徒」字形相当になるので敢えて「𠂔」のように扱った。限定符としては「𠂔」も「イ」も同じ意味合いになる。《走殷》

○𠂔(土) 〓 官職名だが、元は嗣土と書いた。「𠂔(徒)」は「土」に「𠂔」を加えた字形である。後に嗣徒とも書くようになるのは「𠂔」字形が「イ」と「足(止)」の形を書いた結果「徒」字形になるからである。「徒」の音が「ソウ」ではなく「ト」であるのは元の字形が「土」だからである。

○𠂔 〓 「永」+「𠂔」。これは「永」を推移する時間として動的に捉えていることを物語るのではないか。同様の例は、萬年の萬を「邁」、正月の正を「征」として表現している例もある。

○𠂔 〓 省。「省」+「イ」。巡撫省察の省に、道を行く意の限定符「イ」を付加している。動的なイメージが感取できる。

○𠂔(差匹) 〓 左匹(足)。《迷盤》《迷鼎》などに見え、「迷」と釋字されることがあるが、來字形とは異なる「差(左)」+「𠂔」字形であろう。《善鼎》に「左疋」の語が見える。

五 賜與を示す

【貝】
○賁 〓 「壺」+「貝」。「壺」は「休」と同義語で「賜物」の意味に用いられる。「貝」は殷系氏族に對して與えられる「賜物」の代表で、「貝二十朋」のような形で金文に頻出するが、青銅器の作者者が殷系氏族であることを示す指標にもなっている。この「賁」字形の場合、賜物の中に「貝」があることを意識して付加されたものであろう。

【補論】「舍」を言語場において捉え直す

すでに知っている文字に限定符が付加された場合、それによって示される言葉そのものが「會意」のように違ったものになるのかどうかということに当初は注意していたが、今回見てきた文字（語）で分かるように、意味そのものが變わるのではなく、むしろ言葉のイメージをより一層具體的に伝えようとする表現者の意思が感じられる興味深いものばかりであった。こういうものを「象形」と呼ばずしてどうするのであろう。字形要素が付加されたからといって、形式論的に「會意」と呼んでしまうと、「會意」という概念そのものが曖昧になる。そればかりか、言葉と文字との関係を考えるという問題意識からも遠ざかってしまうことになる。まして言語場を追体験してみることなど意識にも上らないであろう。

言語場の追体験と言語の文字表現という視點を得たことよって、これまで漠然と見過ごしていた現象に氣付くことが多くなった。今まで自明のように思っていた文字の示す意味を改めて考え直すという機會も増えた。その中で私なりに發見したものの一つをここで取り上げてみたい。それはこれまで「舍」と釋文してきた「舍」である。左は《小克鼎》に見えるもの。



この文字は、王が發令する場における王の自稱「余」に「口」が付加された字形である。それをこれまで誰もが「舍」と釋文してきたのだが、意味そのものは「(命を)發する」あるいは「(賜物を)與える」である。にもかかわらず、「舍命」を「命を舍く」と訓んだりしてきたため、どうしてもどこかしさが残りしっくり來なかつた。この文字（語）に付加された「口」字形は、以前拙論で甲骨文と金文の用例に基づきながら論證したように、「王命(王言)」を記した冊書を入れた器」を示している。そう捉えれば「舍」字形で示される語が、「(命を)發する」や「(賜物を)與える」の意味で使われているのを容易に説明できるのである。「祝詞を入れた器」という捉え方に固執している限り、意識が神に向かうしかないもので、永遠に解けない問題として残るであろう。「舍」は、儀禮の場における王の自稱「余」に「王言を記した冊書を入れた器」の「口」字形を添えた形になっている。極自然に「王命が發せられる」ことを意味する語(文字)と捉えることができる。「命」に相似た語であるが、「舍」は發する側に立った言葉、「命」は命を拜する側に立った言葉という關係になっている。音は「余」が示しているので、「ジャ」ではなく「ヨ」であろう。王命が發せられる時に何らかの賜物を與えるので、「與える」の意味にもなる。

ここまで進んでくると、以前拙論「西周前期における王姜の役割」で言及した「令」や「休」の使われ方と相通じるところがあることに氣付かれるであろう。「令」は、先ずは王命を發することを意味する語であるが、任官式全體を意味する言葉でもあるので、その結果それに伴う賜物をも含む場合がある。これも私が「古代語」という概念を

提示するきつかけになったものである。

「休」も同様で「與える」を意味する場合がある。「休易」「易休」などと熟語化して使っている場合もある。用例はこの後具體的に見ていくが、「舍」もまた「王命を發する」ことを意味したり、「賜物を」與える」ことを意味したりする語であるが、「令」や「休」とは音も違っているの、語としての區別はあったのであろう。語音という面からいえば、むしろ後起の文字である「與」に相當する語である。郭錫良『漢字古音手冊』⁴⁾によれば次のように記されている。

【余】(古) 餘魚。(廣) 以諸切。餘魚開三平遇。

【與】(古) 餘魚。(廣) 餘呂切。餘語開三上遇。

前者を平聲、後者を上聲に分類されているが、聲調が若干異なるだけのこと、同音であることが分かる。與えるの意の「與」が現われる前の西周時代では「舍」が「與」の役割を果たしていたものと思われる。

このような例は他にもある。例えば助けるの意味の「弼」⁵⁾が現われる以前の西周時代では、「疋」と「匹」とが助けるの意味で使われていたのである。言語と文字との關係を固定的に見ているとこういう現象に氣付かないが、語の機能に注意していれば氣付くことができる筈である。

なお、自稱としての「余」に相當する語として後に「予」が用いられるようになるが、「予」の語音は「與」と同じで「(古) 餘魚。(廣) 餘呂切。餘語開三上遇」とされている。そして「與」と同じように「與

える」の意味でも使われるという點ではなはだ興味深い。

「舍」の用例を掲げておく。時期的には前期から中期の終わり頃まで見られる語である。中期の後の共和期前後の《毛公鼎》邊りが最後の用例になる。この語を用いているのは、主に殷系氏族であるが、中に周公一族の場合がある。ただ周公一族は『殷周革命論』で度々言及したように殷系氏族との關係が深いので、もともと殷系氏族の用いていた語ではないかという見當を付けている。西周中期後半は殷系氏族邊りが最後の用例になっているというのが興味深い。それぞれ訓讀を付けておいたが、命令を「發する」としようが、「與える」としようが、實質的に異なるものではないので、訓讀して違和感がない限りで大體は「與える」で統一した。

「集成」とは「殷周金文集成」で、その収録番號を附した。

「通釋」とは白川靜『金文通釋』で、その本文番號を附した。

【西周前期】

●集成 206 中甌「通釋七一f」 與える。

以王令曰、余令女史「使」小大邦、厥又舍女□量、

(王令を以て曰はく、余、女に令して小大邦に使ひせしむ。厥れ又女に□量を舍ふ。)

●集成 203 令鼎「通釋七三」 與える

王曰、令眾奮、乃克至、余其舍女臣卅家

(王曰く、令と奮よ。乃ち克く至らば、余は其れ汝に臣卅家を舎へむと。)

●集成 3901 作冊矢令方彝「通釋二五」 與える(発する)

佳十月、月吉癸未、明公朝至于成周、徂令舎三事令、眾卿事寮眾者尹眾里君眾百工眾者侯、疾・田・男、舎四方令、既威令

(佳十月、月の吉癸未、明公朝に成周に至り、出でて三事に令を舎へしむ。卿事寮と諸尹と里君と百工と諸侯、侯・田・男に、四方の令を舎ふ。既りて威く令す。)

●霸殷(考古)二〇一一年第七期) 與える

内公舎霸馬兩・玉・金・用鑄殷

(芮公、霸に馬兩・玉・金を舎ふ。用て殷を鑄る。)

【西周中期】

●集成 252 癸鐘「通積補一一・〇」 與える

武王則令周公舎寓曰五十頌處

(武王則ち周公に令して寓を舎ふるに、五十頌の處を以てす。)

●集成 28312 九年衛鼎 與える

「舎矩姜帛三兩」「廼舎裘衛林孤里」「我舎顔陳大馬兩」「舎顔如處」

「舎顔有鬲鬻商鬲裘」「舎盞冒梯。……以下略」 略記したがみな

「舎ふ」の訓みになる。

●集成 2832 五祀衛鼎 與える

「余舎女田五田」「廼舎寓于厥邑」 前項と同じくみな「舎ふ」の訓

みになる。

●集成 2838 習鼎「通積一三五」 與える

眚廼每于昏(曰)、女其舎駮矢五秉

(眚、廼ち昏に誨へて曰く、女其れ駮に矢五秉を舎へよと。)

●集成 3956 裘衛盃「通積補一一」 與える

「其舎田十田」「其舎田三田」みな「舎ふ」の訓みになる。

●集成 1075 史牆盤「通積補一五」 與える

武王則令周公、舎寓于周卑處

(武王則ち周公に令し、寓を周に舎へて處ら卑む)

●尚孟(考古)二〇一一年第七期) 與える

「或舎賓馬」(或は賓に馬を舎へたり)

●集成 1076 散氏盤「通積一三九」 與える

凡十又五夫、正眉矢舎散田

(凡て十又五夫、眉なる矢、散に舎ふる田を正す。)

●集成 2796 ~ 2802 小克鼎「通積一六八」 與える(発する)

王命善夫克、舎令于成周、適正八百之年、

(王、善夫克に命じ、令を成周に舎し、八師を適正せしむるの年なり。)

●集成 2841 毛公鼎「通積一八一」 與える(発する)

(注) 毛公鼎は共和期前後のものだが中期に入れた。

父厝舎命(父厝、命を舎す)

●集成 4011 ~ 4013 復公子簋(注)報告者は後期とする。 發する(與

える)

復公子白舎曰、啟新、乍我姑登孟媿贖殷、永壽用之

(復公子伯舎^{はつ}して曰く、改新、我が姑登孟媿の贖段を作る。永壽、之を用ひよ)

おわりに

今回「限定符」を付加した文字表現として扱ったのは、比較的知られている文字(語)なのに敢えてそれに限定符を加えた文字である。意味そのものに變わりはないのだが、その付加要素によって言葉のイメージに膨らみ加わり、意味を理解する助けになるという効果があった。中には「客」や「洛」などのように、よく知られている意味とは異なる意味を示している場合があって戸惑われた方もあるだろう。だがこういうものが付加された文字を「會意」とは呼びにくい理由も少しは理解していただけたのではないだろうか。金文の言語世界は、限定符を加えて意味そのものを區別する「會意」概念が成立する前の「象形」の世界である。

言葉の意味というものは、文字を記した者の立脚点、言い換えれば言語場をよく把握していないと、十分に理解できないことがある。現在の言語世界でもそうした側面があるの言うまでもないが、古代語の場合特にそれが著しい。今我々が使っている「漢字の意味」をそのまま適用しても理解できないことが多いのは、文字に託された言葉の意味が變容しているからである。ここに古代語を文字で記した古代文献の難しさがある。

今回はもう少し多くの限定符を扱いたかったが、用例の分析にかなり手間隙をかける必要のあるものもあり、今回は見送った。また別の

機会に追加したいと思う。

【注】「紀要」と略記したのは「立命館白川静記念東洋文字文化研究所紀要」を指す。

- (1) 高島敏夫「莽京辟雍儀禮の特質と歴史的役割」(上)(下)「紀要」第十二號・十三號」などを参照。
- (2) 高島敏夫『殷周革命論《話體版》』(朋友書店)所収の「第一部 第十二章」の「册令(命)形式金文と中央集權の問題」参照。
- (3) 「紀要」第八號 参照。
- (4) 商務印書館 二〇一〇年。「増訂本」
- (5) 前掲(1) 参照。

(立命館白川静記念東洋文字文化研究所客員研究員)